

ハリル イブラ ヒ ム アブドゥル=マジ ド

米国出身の元キリスト教徒（下）

:

明:彼がサウジアラビアでいかにイスラ ムについての をし、改宗に至ったかについて。

目:[事新改宗者ムスリムの逸 男性](#)

より: ハリル イブラ ヒ ム アブドゥル=マジ ド

日 08 Jun 2015

集日 08 Jun 2015

1月の始め、私はクルマを所有したいという、どうしようもない程の欲求に られました。それは、私の「やることリスト」の最 先事 の一つで、 の片隅に常にありました。その2日、木曜日の午 に仕事から 宅した私は昼寝をし、目 まし はセットしなかったものの、礼 の 店 になるとクルマの翻 本を いに出かけることを 意していました。午 の礼 のアザ ンがけたたましく り始めると私は さぶり起こされましたが、疲れていた私は自分にこう言いました。「もうちょっと寝て、クルマは で いに行くことにしよう。どっちみちそれは必要なものではないだろう？」 の中でこれが こえると、私はベッドから び出して服を着替えました。私の は寝癖で 茶苦茶だったので、野球帽をかぶりました。タクシ を呼び止めた私は、ムスリムになりたい旨を 手に えました。彼はその 意を 迎し、私たちはジャリ ル ブックストアへと向かいました。道の途中では酷い 滞に きまれ、ようやく到着したのは良かったものの、あたかもアル=コバ ルの人口の半数近くがそこへ入ろうとしていたかのように混み合っていました。私は 籍セクションへの 段を急いで け上り、必死に探し始めました。そこは大量の本と人でごった返していました。どこにあるのか分からなかったため、私はようやく店 をつかまえ、クルマの置かれているセクションを教えてくださいました。彼にそれが り切れということを告げられると、私はついカッとなり怒 りつけてしまいました。「そんなことがあり得るのかい？ ここはイスラ ムの中心地、サウジアラビアなんだぞ？

君はクルアンの英訳がここにはないと言っているのか？」失望した私は、わくわくしながら待っているタクシの手の元に手ぶらでってきました。私たちはどちらもがっかりし、の店を探し始めましたが、の病院の付近にもジャリルブックストアがあったのを思い出し、そこへ直行しました。そこに到着したのは夜の礼のになってからでした。手は付近のモスクへ礼へ行き、私は他の非ムスリムがするように店の外で礼に店するまで待っていました。やがて店すると、私は他のよりも早く店にめ寄り、事にクルアンの本を入することに成功しました。そこではセル格からさらに割引さえしてくれました。ひよっとすると彼も私の中に何かを出したのかも知れません。例のタクシ手は私たちがあきらめなかったこと、そして私が欲しかったものを入手したことに足でした。

にも勘付かれることのないよう、クルアンの本をみ始めました。めばむ程、が浮かび上がってきましたが、自分が何をしているのか（つまりイスラムを徐々に受け入れていること）がばれてしまうのを恐れてにもけずにいました。真理の探求を阻むのは、仕事のだけだったという期もありました。何日もかけてクルアンをみ解き、バイブルからも答えを探し出そうとしていました。私のはイエス（彼に平安あれ）にまつわることを中心としたものでした。彼は、どういった人物だったのでしょうか？

彼は本当に神だったのか、また三位一体の一つだったのでしょうか？

私はすでに唯一神を信じていたため、この疑には苦しみました。キリスト教徒として、その神がアッラなのかどうか疑に思っていました。唯一なる神しか存在しないことは、ムスリムの友人たちやたちが皆、唯一神は他ならぬアッラであるという事を言していたように、私にとっても明白でした。私は真に去の信仰について疑を抱くようになりました。その段では、まだムスリムになる用意はできていませんでした。しばらくあったある日、私がお祈り用の数珠をポケットの中にはなく手に持って上司の部屋に入ったところ、彼はこう言いました。「まるで君はムスリムのようなだよ、マイケル！ひよっとして改宗でも考えているのかい？」彼は半分冗で、そして半分真面目に言いました。私は彼の机の前に腰を下ろし、「はそうなんです。」と言いました。それは烈な瞬であり、おそらく私たちは2人とも、その朝のことを忘れることはないでしょう。彼は机のから私に近づき、私の手を握りしめ、私の改宗を助けるためなら何でもす

るよと言ってくれました。私は感 じ、その申し出を受け入れ、彼による指 を求め、彼は合意しました。私は に幸せいっぱい、それからより真理の探求に力を注ぐようになりました。私はクルア ンとバイブルを み始めました。ある深夜、私はクルア ンの最の数ペ ジに目を通していました。そこに「バイブルとクルア ンにおけるイエスとムハンマド（彼らに平安あれ）： イエスが神の であり、神格性を有してはいないことを指し示すバイブルの典 」と 打たれセクションを つけました。私はそれらの10ペ ジをゆっくりと慎重に み め、 度か み返してみました。「イエスは神ではない」などあり得ることなのではないでしょうか。私はマタイ、ヨハネ、マルコの福音 をそれぞれ みました。バイブルに目をやり、その著者について、そして新 の赤い字で かれた部分をイエスが に述べたのかということについて べてみました。私は、1970年代から80年代にかけて、何人もの宗教学者たちがバイブルを2回改 したものの、イエスが にバイブルの中で著した言は一言もないということ を しました。 かれていることは全て、彼の地上における 大なる人生が わりを迎えた大分 になってからのことなのです。私はクルア ンに って を けると、そこには明 に、アッラ がイエスを 造し、マリアが 女であったことが 述されていました。神はただ「有れ」と言っただけで、彼の存在はもたらされたのです。彼は、人々に正しい道を くためにアッラ によって遣わされたムスリムだったのです。また、彼は して死んだのではなく、 在は天国におり、やがてアッラ の御意どおりに再び地上にり、世界を 治すると述べられています。また私の研究からは、アッラ がその教えをクルア ンとして 言者ムハンマドに 示し、それが 写家により き され、ムハンマド自身によって 作 が行われたことが分かりました。私の心の目は完全に されました。唯一神の概念はそこにあり、アッラ 以外に崇 される 利はなく、ムハンマドはアッラ の使徒であるという事 に疑 はなくなりました。なぜキリスト教徒たちはあれ程までに取り えてしまったのでしょうか。3つは1つではなく、唯一 であり、かれこそはアッラ なのです。イエスが神であるという信仰に を抱えていたのは 理もないことだったのです。ただ に、彼は神ではなかったのです！

もちろん、彼は神の使徒という重要な存在ではあるものの、神ご自身ではないのです。

。

私はこのことが自分の心の中にあることを知ると、直ちにイスラムを受け入れました。その瞬間、私はかれに属的となりました。そして改宗するにはと会えば良いのかとおおっぴらにくようになりました。そして私はある宗教者を介されました。そうなる、私は大股でしながら、それまでに感じたこともなかったような上分になりました。私は尊敬されている宗教者と会い、いし合いの末に信仰言をしました。彼は私を抱し、もうあなたはイスラムを受け入れたムスリムだよと言ってくれました。私たちは抱を交わし、私は泣きそうになりました。その夜、私はコンパウンドのモスクで最初の礼をしました。私はとても多くの人々からの抱を受けました。翌日、私はイマムと会い、彼のオフィスで再度信仰言をしました。彼は私に正午の礼にも来るよう言い、私はそうしました。そのとき彼はそのにいた全に私を介し、私に前に来るよう求めました。彼は私に何か言うことはあるかといてきました。私は再度彼らの前で信仰言をし、く自己介と改宗のを述べました。それがわると、モスクの中の全が私のもとにきて握手と抱をしました。それまで、一度もあのような情と思いやりにちた迎をされたことはありませんでした。私はしました。ムスリムになったは、切な礼方法を先生に教えてもらいました。今ではすべての礼を内に行い、30の本と子、そして2000ページ分のイスラムにする子籍をみました。

私は、息子、兄弟にして、自分の信仰のをし、彼らにはその事を温かく受け入れてもらうことができました。

私は在、自分の名前をマイケルアレンウイilsonから、ハリルイブラヒムアブドゥル＝マジドに法的に更する手きの途中です。

私は耳をけてくれる人たち全に、自分の知る真理についてしけています。

私はこれまで、ムスリムやキリスト教徒たちから度となく、なぜムスリムになったかをかれました。私はただ、アッラがかれの言者ムハンマドに、アッラのみを崇し、アッラの御意にかなう人生を生き、それが世と来世で成功する唯一の道であるという示を下したということを知ったため、天国で至福の生活というを受けるためそうしたのだと言うことしかできません。今の私はたされており、幸福です。

アッラ に称えあれ。

この 事のウェブアドレス:

<https://www.islamreligion.com/jp/articles/2288>

著作 2006-2015 断 を禁じます。 2006 - 2023 IslamReligion.com. 断 を禁じます。